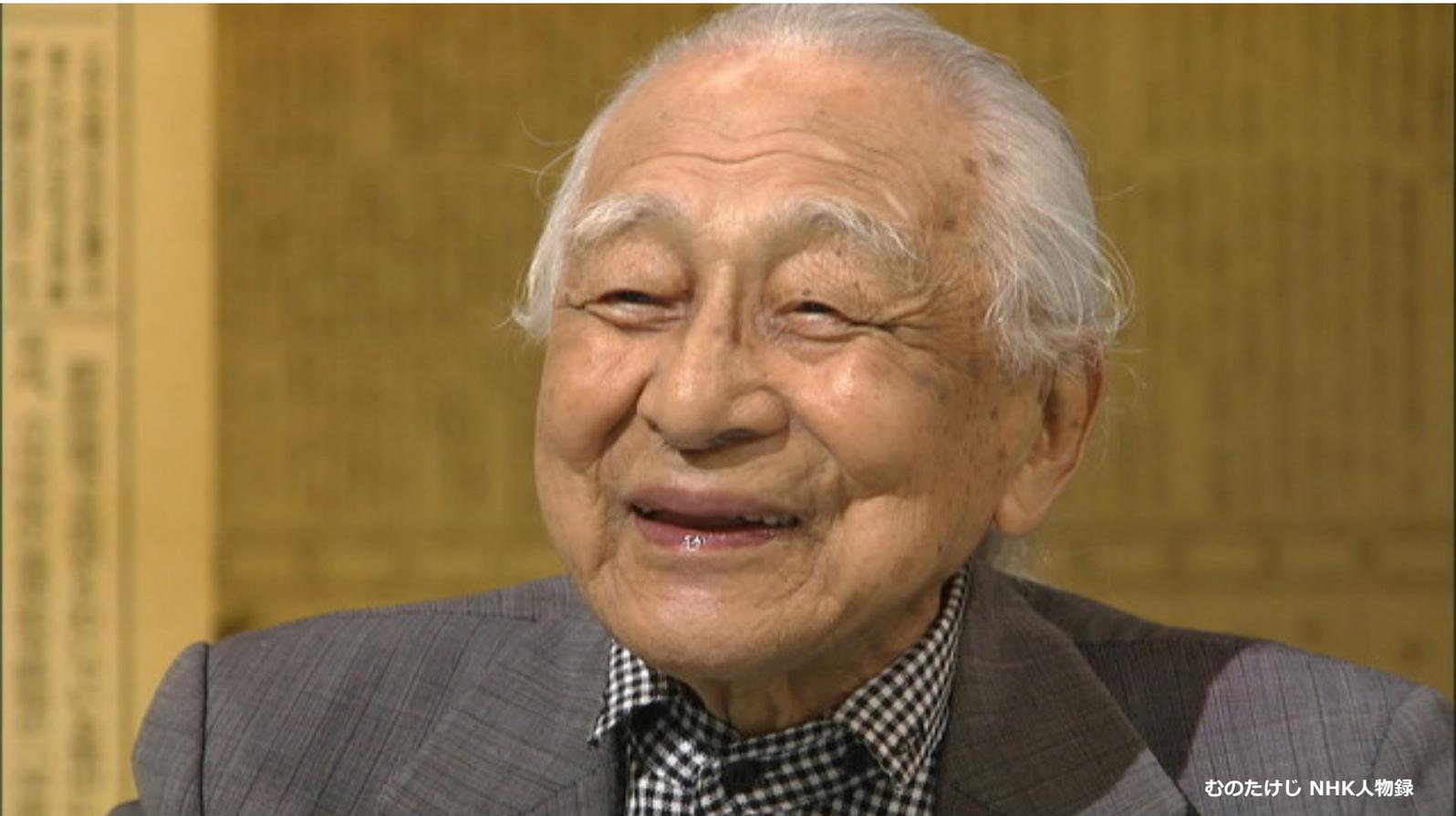


第2回 「むのたけじ反戦塾」 手元資料



むのたけじ NHK人物録

- 日時 2023年3月12日（日）
13時30分～17時00分
- 会場 文京区民センター3C会議室

【プログラム】

13:00 開場 13:30 開会

プログラム（案）

- ① 自己紹介（それぞれの考えを出し合う）
- ② むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』
第1章「現在を刺す七〇〇万年の歩み」から（P.27～54）
- ③ トークゲスト：
岩波新書の編集にあたられた坂巻克己さん
- ④ 参考映像 NNNドキュメント『シリーズ戦後70年
100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対』
- ⑤ フリートーク

*参加希望者は下記までご連絡を！

参加費：1000円 学生・若者：500円

【この手元資料の内容】

- 資料① 第2回むのたけじ反戦塾のよびかけ
（そこで、何をするか？）
- 資料② 第2回 むのたけじ反戦塾のプログラム
- 資料③ 第1回むのたけじ反戦塾
（2022年12月18日）の記録資料・自己紹介
- 資料④ むのたけじの憲法に対する考えについて、
憲法学者はどのように見るか
愛敬浩二さん
- 資料⑤ ロシアのウクライナ侵略を目にして
武野大策
- 資料⑥ 「希望は絶望のど真ん中に」
第一章「現在を刺す七〇〇万年の歩み」

むのたけじ反戦塾

問合せ先：090-4599-5314
〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

資料① 第2回むのたけじ反戦塾のよびかけ (そこで、何をするか?)

2022年12月18日に、私たちが呼びかけた『むのたけじ反戦塾』に参加していただいた人は27人、3時間半にわたって熱のこもった話が聞けて感動しました。

なかでも、自己紹介の段階から、話は、一人一人が、いま「何とかしなくてはならない」という思いの話が始まり、自己紹介だけで1時間近くになってしまいました。

その録音からの「書き起こし」を、3ページから記録として記載させていただきました。こうした一人一人が、今、思っていることを短くても、長くても話してみることがこの「反戦塾」の肝だと思ったからです。

そこで第2回の話し合いは、前回参加された方がお話しされたことの中から、二つほど、設問を出させていただいて、それについて知っていることを交えて、再び自己紹介していくところから始めたいと思いました。

私たちが考えた設問とは、

- ①今のわが国の戦争への危険について知るにはどのような方法があるか?
講演、映像、書籍、雑誌、……
- ②それを正しく知らせ、問題化するアイディアにはどのようなものがあるか?

もちろん始めて参加される人には、前回のように「なぜこの会に来たのか?」を話していただければ結構です。

前回の話し合いに参加された方には、そこで多くの方が話された「今のわが国の『戦争』への危険が心配」一步進めて、そのことについてどんなことを知っているか、それを知らない人に知らせていくにはどのようなやり方があるか、知っていること、思っていること、アイディアを出し合っていきたいと思えます。

もちろん話が得意で無い方は、聞き役に回っていただいて結構です。「何とかしたい」と思っている気持ちを「少しでも何か出来る」と思えるようなものになればと思っています。

その後のお話は、前回同様に、むのたけじさんの著作『希望は絶望のど真ん中に』を1章づつ読み解いていく形で話し合いを進めたいと思っています。(この資料の巻末からさかのぼってその1章の部分「現在を刺す七〇〇万年の歩み」のコピーを載せています。前回同様、会の始まる前に目を通していただければ、話し合いの手がかりになると思います。)

前回は序章の「歴史の歩みは省略を許さない」では、その中でむのさんが書かれた「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることの条件であり資格だ」という一文が論議を呼びました。今回、その論議の到達点をもう一度復習し、さらにむのさんが「戦争を無くす」「戦争を殺す」ためにどのような考えを展開しているのか、この本全体の中から、探してい区話し合いをしていきたいと思えます。

映像は、NNNドキュメント『シリーズ戦後70年 100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対』を用意しました。

また前回、話を聞けなかったむのさんの岩波新書を編集された坂巻克己さんにお話を伺いたいと思っています。

前回は話が盛り上がりすぎて、時間が足りなく感じる位でした。今回はあらかじめ、会場の夜の時間をとっていますが、前回より30分延長して17時までとしています。

資料② 第2回 むのたけじ反戦塾のプログラム

第2回 むのたけじ反戦塾

日時：2022年3月12日(日)
13:30~17:00
会場：文京区民センター 3C会議室

テーマ：戦争はいらぬ
戦争をやらぬ世へ

プログラム(予定)：

- ① 新参加の人を中心に自己紹介。
第1回の参加者の自己紹介では、多くの方が「今のわが国の『戦争』への危険が心配」という声が聞かれました。そこで、今回は、それぞれの問題意識を出し合う意味で次のような設問を用意しました。(60分位)
設問：①今のわが国の戦争への危険について知るにはどのような方法があるか?
(講演、映像、書籍、雑誌、などなるべくと思ったことを出し合おう……)
②それを正しく知らせ、問題化するアイディアにはどのようなものがあるか?
- ② むのたけじ著 岩波新書『希望は絶望のど真ん中に』第1章「現在を刺す七〇〇万年の歩み」(30分)
 - ・前回(2022年12月18日)第1回「序章：歴史の歩みは省略をゆるさない」の話し合いを復習。その流れからの確認
 - ・各人の印象に残った箇所披露(事前に読んで、思わず傍線を引いた部分など)
 - ・第1章で考えられるテーマ・提言
 - ・国際という欺瞞(『国際』なんて愚かなこと)
 - ・〈女性主導の世へ、若者中心の世へ〉
- ③ 坂巻克己さん(岩波新書・編集者)とのお話(20分)
 - ・②の話し合いのまとめとして、むのさんとこの本をつくられたときの様子を、編集者の坂巻さんにお尋ねし、その時のむのさんのお話を聞きます。
 - ・前回予定してお話を聞けず申し訳ありませんでした。
- ④ 参考上映：NNNドキュメント『シリーズ戦後70年 100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対』(30分)
 - ・制作：秋田放送
- ⑤ フリートーク(40分)
 - ・何でもふだん思っていることを出し合ひましょう。

※参加希望者のご連絡をお願いします。
問合せ先：090-4599-5314 武野
E-Mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

● 第3回 「むのたけじ反戦塾」の予定

2023年5月か6月を予定しています。
今までの参加者には、決まり次第ご案内します。
第1回と同じように手元資料を先にお送りします。



資料③ 第1回むのたけじ反戦塾（2022年12月18日）の記録（1）



※この「第1回むのたけじ反戦塾記録」は、自己紹介部分のみを載せたものです。録音したテープから書き起こしましたが、どうも編集者の知識と教養の無さから、聞き取れなかったり、よくわからなかったりしたところがありました。話者のイニシャルから、ご自分の発言と思われるところで、間違いがありましたらお知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。なお自己紹介以外の本討論の記録も、第2回の日（12日）までに資料として間に合わせます。

【参加者・自己紹介】

●M.T.（男性）武野大策さんと同じ世代。72歳。1970年頃高校1年か2年。武野さんの「詩集たいまつ」を読んだ。むのたけじさんという名前とジャーナリズムを貫いていくという印象を非常に強く持ってこの会に参加して、むのたけじさんとの出会いが50年ぶりに出来る。

●T.K.（男性） 憲法を考える映画の会に参加して今回来ました。仕事はすでにリタイアしている。支援学校の教員（?）。有明の憲法集会に参加。むのたけじさんの話いつも打たれるものがあった。

●K.Y.（女性）

●N.M.（女性）世界がおかしな方向に向かっていくことに対して何かしなければと思いつつ何も出来ない自分なんですが、昨年絵本の講習会に出たとき、そこにむのたけじさんの本があった。子どもに対して子守歌は寝かしつけるように歌われるが、もっと子どもも覚醒しなければならぬと書いてあった。むのたけじさんのことをもっと知りたいと思っていたところにこの会の案内があった。

●T.I.（女性）午前中に阿部美砂さんのツイッターを拝見。むのたけじさんのお名前知らなかったのですが、これはご縁かなと思つて。

●S.M.（男性）北海道から用事があってでできた森と言います。最新の新聞は攘夷（?）強く出ていてこれはもう大変な状態になっているなど、敵国が日本に来る、予想というか嫌な予感がします。我々どうすれば良いかという課題をもっていて、きょうは学ばせていただきたいと思います。

●K.Y.（女性）西東京市から来ました。このホールで『教育と愛国』を見に来たときにチラシが入っていた。むのたけじさんってすごい人だとは漠然と思っていたが、印象深いのは歯がないということ。それが尊敬することで、私の歯医者者を黙らせた原因の一つ。何か一歩、デモに行ったりはするんですけど、どうもそれからうんともすんとも行かないんで、また一歩前に行くようなことがあればと言うことでできております。でもあんまり知りません。よく勉強しているわけではないです。

●A.I.（男性）渋谷区から来ました。父は職業軍人だったのですが、高3の受験直前に他界して、実は父のことを何も知らないの、聞こうと思っても誰もいないと言うことで、80近くになってから、あの戦争はいったい何だったんだと思ひ返して、学び直して振り返ることが軍人を父に持つ私のつとめと言うか、責任じゃないかと思ひまして、日本の近現代史を学び直しまして、それを自分なりに確認すると言うことが今の危うい世相というか、武野さんがその中で言われている「最大の課題は戦争を無くすことだ」と言うことにもつながるんじゃないかと考えてこの会に参加しました。

●H.K.（男性）「希望は絶望のど真ん中に」を読ませていただいた日本をどうするのかというのは難しいと思ひました。きょうは、『日本人はなぜ戦争に向かったのか』というNHKスペシャル、なるべくドキュメンタリーとかを見るようにしているんですけど、それと、本の編集にあたられた方のお話を聞けるということで来ました。

●S.K.（男性）川越から来ました。昨年ジャーナリズム賞の中で、アスベストの問題がありました。それに関連して私も東京土建に入っていて建築の仕事をしています。私自身も軽度なんですけどアスベストに罹患したという経緯があります。私、昭和16年、ハワイの真珠湾攻撃の年の8月に生まれました。たまたま今年81になってしまつて、もう一度両親の苦労とか、いろんな、東京大空襲で家を焼かれたとか、それらをもう少しきちんと僕らも勉強し直す、反省もあって、後まあ10年位は（勉強）したいと思ひています。

●M.K.（男性）浦和から来ました。浦和へは引っ越して30年になります。その前は国立とか、立川に住んでいたものですから、それらの知り合い、友達、かさねとおみさん、亡くなられたんですけど、彼らと一緒につい最近、12月1日国立のつながっています。むのさんに関しては、またこれからと言うことです。

●K.S.（男性）日野から来ました。75歳です。11年前まで岩波書店にちょうど40年いて、その中でむのさんにずいぶんお世話になっていてですね。本を担当させていただいたり。ただ、最初にお断りしておきたいのは、「希望は絶望のど真ん中」という本なんですけど、これを立案というか、発案という最初の段階では関わったんですけど、すぐに私、定年退職が迫っていたもので、後輩に委ねたものなんです。実際の編集は別な者がやっているの、あまり詳しいことがお話できないですが、その前に出た「戦争絶滅へ」これは最初から20年近くかかってできあがったものなんですけど、これは最初からできあがるまで私が担当したものですから、そのことなども含めてむのたけじさんとの思い出と言いますか、いろいろありますから、後でゆっくり話させてもらおうと思ひます。

●S.T.（男性）千葉県船橋市から来ました。1951年生まれ71歳。来年3月1日に72歳。きょう知り合いと昼食のときにビールを一口飲んだらアルコールに弱いので。夜間大学にいたときの同級生と55年ぶりに会って、すみません。今すごく無力感を感じている。20代前半から船橋駅の駅頭に立って被爆者援護の取り組みをやつて、今100人位のメンバーと一緒に船橋で平和運動をやっているんですけど、どうも無力感がすごくて、選挙で3割くらいの投票率しか無い、閣議決定がバンバンやられる、どうも武器がどんどん増える、私は税金の仕事をずっとやってきたものから、じゃあミサイル1000発もったら戦争に勝てるのか、と、仮に勝つたとしてもどれだけのお互いに犠牲が出るのか。中学3年生と30分、先日話したんですけど、目の色は変わりませんでした。（次ページへ）

資料③ 第1回むのたけじ反戦塾(2022年12月18日)の記録 (2)

(前ページより続く)日本人が日本の国を守るのは当たり前だろうと。これは変えることができませんでした。あの(メイレイで?)言ったでも何でもないので、話し合ったんですけど、変えられませんでしたね。そういう中で何か無力感をもって何か見つからないかなと、駅頭で一人で立つのは僕は平気なんですけど人に言うのができないんですね。自分は人に言われるのが嫌なんで、人に言うのも嫌なんでね。高校時代応援団にいたんです。天皇124代覚えなくて殴られたんです。……。この覚えさせられたことがみんな嘘だって言うことが高校出てわかったんです。歴史って言うのはときの支配者が自分たちの都合いいように作るんだって言うことがこういうことに関心をもったきっかけだったんで、同じことを繰り返してはいけないなってものでも書かれて自分たちは暖かいところにいる、いろんな歴史を作るのも許せないなとすることで、あと何年生きられるか分からないですけどやれることはやりたいなと思って参加させてもらいました。耳がおかしくなっているんで、もう参加もきつくなってるかなと感じがしていますが、どうぞよろしく。

●C.I. (男性) 朝日新聞の記者を40年やってきて、今も退職して8年になってます。9条の会の世話人なんかもしています。むのたけじさんとは面識ありませんし、本を読んだのは今回きっかけに初めてでした。むのさんは新聞社での先輩にあたる。新聞が戦争に対して力がなかったと言うことで、自分の新しい新聞を始めたと言うことです。すごく共感を持つわけですね。もちろん、ただ武野さんの言うことに全面的に共感するわけでも無いし、ここに書かれているものにいろいろな反論もありますけれど、車座になって話すと、まず一人が自分から何かやらなければいけないと言うことにはとても共感するんですね。それでも僕は無力だと思ってませんし、社会はすぐに変わるわけではないと言うことは認識しているつもりです。みなさんがどういうお考えをお持ちなのかと言うことも興味を持って参加させていただきました。

●H.I. (男性) 東松山市。武野さんの本、この新書を読ませていただいたら11ページに大変ショッキングなことが書いてありますね。「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることの条件で有り、資格だ」と11ページの下段に書いてある。これは憲法第9条の2項はダメだって言ってるんですよ。みなさんご存じのように(憲法では)軍隊と兵器の所持はダメだって行ってるんですよ、ところがですね、12月16日、岸田政権は閣議決定で大転換をした。その目玉がどこにあったかというんですね。トマホークは長距離弾道ミサイルだから。反撃能力、敵基地攻撃能力を保持するって言うことでしょ。これ憲法第9条第2項〇〇違反ですよ。だって兵器の所持、交戦権の否定が第2項でしょ。これが世界に名だたる第9条の主眼とするところですよ、それを国会の審議、国民の審判を受けないまま、閣議決定でこれをやって、もうやるって決めちゃっているんです。これは憲法第9条をパーにしたって言う大転換ですよ。

それでほんの一握りの人が国会前に集まって、ダメだダメだってデモしてるだけ。ほんとうだったら国がひっくり返るような大騒ぎになって当然のことですよ。憲法の一番骨子となるところが、今、ブチ壊されたんですよ。岸田政権によって、国会も開かれてないんですよ。閣議決定で決めちゃってるんですよ。アメリカでも内々ではもうやることを決めて……(コーミン?)を決めて今や軍事費をどうやって捻出するか、税金を上げてそれで、我々の税金だというのに我々に何も聞かないで、しかも憲法の大基本をブチ壊してですね。閣議決定でやるって。ところが今日来たのは、むのさんのその資料に書いてあるように交戦権と軍隊と兵器の所持、9条2項ですよ。これは国家であることの条件であり、資格だって書いてあるんですよ。衝撃を受けてどうするか考えたって。その後で、むのさんは、どういう風に戦争反対をいのちがけで戦うかって言っているんですが、むのさんが憲法第9条の第2項の国家であることの基本条件であること、そこところをどういう風に考え直して捉えたいのか、と言うことをみなさんのトークンの中からも学んでいきたい。これは二重の意味できわめてリアリティな、むのさんの発言だと、我々はこの重大な時期にこのことを考えなくちゃいけない、みなさんの考え方を是非拝聴したい。

●D.M. (男性) 息子です。63年間つき合った、ある意味でむのたけじを一番よく知っている。石井さんが言ったことって言うのは、もともと80年代、坂巻さんがやったときだからちょうど(岩波新書)「戦争絶滅、人間復活へ」の中で、始めて武器を持たないのはあれだって言うことを書いているんです。そのことではいろんな人が、鎌田さんとか、どう変わったのかと言うことをいろいろ問合せさせていたんです。そのことでこの「希望は絶望のど真ん中に」を作ることになりました。ただいま言われたように、必ずしも、武器…、あまり長くなると、この本のことを言われてますので、簡単に言いますけれども、必ずしも私が父に求めた本だったのだけれども、ここにある意味でわからないんです。必ずしも改憲論者が言うように、武器兵器をもたなければ国として認められないから、普通の国家になろうという意図はもともと無い。無いんだけれどもそのような文章を書いてそれを打ち崩すためにはどうするかと言うことが主眼だったようなんだだけれども、そのあたりのことは十分書けてないし、これを打ち破るためにみなさんが戦争をやめ世の中に、もちろんこれは私の個人的な考え方ですし、みなさんどのように考えていくかは後で聞かせていただければと思っております。私自身はこの会を開くという形で…、私にとって親子関係で、いろんなことをしてるんですけど、あまりこのようなことには興味を持たないほうで、いろいろ知識を上げられますねってことで、私自身もみなさんと同じで、勉強させていただきたいと思っています。

●I.K. (男性) 八潮市。たまたまFacebookを見ていたら出てきたので、じゃあ行こうと言うことで参りました。私は20代の頃から、むのたけじさんの「たいまつ」という本を愛読しておりまして、非常に影響を受けました。今から考えると私たちの仲人をやってくれたんじゃないか、と。もちろんリアルにやっていたわけじゃないんですが、私が女房を口説くときに詩集たいまつの中にある一節、「恋するとは心を変えることである、自分を変えることで相手を変えたいという願望である」と言うくだりがありましてね、彼女を喫茶店に呼び出してまずそれを読んで、「こういうことなんだ、どうだ、つき合わないか」と言うことで、結婚まで至ったわけですので、そういうことでは、むのさんは、影の仲人であったのではないかと考えてます。もうひとつは、私のやっている発電の仕組みと原発事故についての出前授業をやっている、その問題と現代社会は電力の時代と内燃機関の時代なので、その問題と反戦思想を結びつけていきたいと思ってまして。私はこの間、昨日ですか、岸田の演説を聞いていて東條英機を思い出しました。あの能面のような気持ちの悪い顔で淡々とやっている中身は東條英機が国民に向かって語っていることと同じなのではないかと、そういう危機感を持ちまして、参加したいと思いました。

●T.I. (男性) 大宮市から来ました。安民法制訴訟の全国事務局長をやっています。全国で22箇所安民法制の裁判が行われている。違憲判決が出たところはひとつもありません。みんな棄却で逃げられています。裁判官というのは、国賠の裁判だから、みなさんが戦争で死んだとか傷を負ったとか、そういう事実が無い限り被害が及んでないから判決は出せないと、棄却でみんな逃げてますね。今の憲法はアジア人2000万人、日本人310万人死んだその反省として生まれたんだ言うことを裁判官自身が考えないですね。全く戦争を知らない世代ですからね。戦争が始まったらもう両方とも壊滅ですよ。それをマスコミ、全然言っていない。まさに中国が攻めてきたら、北朝鮮が攻めてきたらと言うことで脅かして、政府もそれじゃ(?)という風にしようとする。そんな酷いことを絶対に許せないわけだけど、そういう世論が起きてないですね、残念ながら。(次ページへ)

資料③ 第1回むのたけじ反戦塾（2022年12月18日）の記録（3）

（前ページより続く）田中角栄さんが日中の……ですけど、彼がすばらしいことを言ったのは、娘さんが「一緒に行きたい」って言ったんですよね。娘の田中真紀子さん。そしたら「絶対に行かせない」と。それは「今度私は命がけだ」と。娘を連れて行ったら殺されるかもしれない、と言ったそうです。僕はもっともだと思わうんですね。中国人に対して日本人は何をしたか、朝鮮人に対して何をしたら、そこがね、今の岸田が敵基地攻撃論なんて出してるけど、そこで全くわかってない、とんでもないことですよ。また北朝鮮との戦後補償も出て来ないんですよ。70年たっても全く反省してない。そこがね僕はマスコミが一番欠落しているところだと思いますね。で、そういう意味で我々が反省していれば、朝鮮人も中国人も仲良くしてくれますよ。そこが無いから何か敵対関係みたいになっているんですね。

●M.K.（女性）「憲法を考える映画の会」のお知らせで、老骨に鞭打って、万障繰り合わせてきました。むのたけじさんとはずいぶん今まで、いろんな会に出たり、お別れ会にも出たり、いろいろ思い出することがあります。これからどれだけ参加できるかわかりませんが、参加させていただきましました。

●Y.T.（男性）むのたけじさんが、敗戦の日に席を立てて潔く（朝日新聞を）離れました。マスコミに6年あまり…私も…まで仕事しました。むのさんと直接の接点はですね、16年前になるんですけど、戦争と新聞との関わりって言うのを、もう一度みんなで見つめ直そうというのをやまして、その際に何度か、むのさんにもお話をお伺いさせていただきました。むのさんがおっしゃっててことをあまり簡単にするなよ、と言われそうなんだけど、私なりに思いますが、やっぱり戦争って言うのは、一度転がりだすととんでもないことになる、とてもメディア、マスコミが頑張ったって止められもんじゃないよ、実際、最後まで二つの地方紙はとんでも頑張ったと私は思ってるんですけど、ま、私の勤めていた新聞なんかは、そんな皆、従業員が巷に迷うことはできるかという当時の経営責任者の判断があったと聞いております。今日ここに来ているのは、多分、ほとんどの方々と共通する問題意識かと思えます。やっぱりむのさん、「（戦争は）もう1回始まるとなかなか止めらんないよ」と言う風にお感じになっていた。おっしゃっていた戦争にどんどんどんどん近づいて来て、いったいこれに対して何をすべきなのかというのを、私自分なりに考えたいと思って皆様のお考えを伺いたいと思ってまいりました。

●R.S.（女性）豊島区。84歳になりました。ずっとジェンダーだとか、フェミニズムの問題だとか、カネミ油症の被害者の支援のことをずっと今も続けているんですけど、5年前に夫が亡くなったときに夫の僕は神様が僕に戻って（?）、本を書きました。その後、遺言のように私は「日本人女性の出番」という本を書こうとしてたら、ウクライナのことを知って、えっ～こんな時代にこんなことがあるのかって思って、どうして日本人女性の頭にそのことを入れ込まなきゃいけないの。何でかって言うと、みんな「お母さん」って言って、もう子どももいますし、孫もいるので、平和ってものをきちんと書けるような本にしたい、日本人女性が育ってほしいということを書いて、きょうも20日に首相官邸前でアピールもあるんだけどって言われて、何とかもう少し頑張ってやっていきたいと思えます。

●H.N.（男性）調布市から来ました。憲法を考える映画の会でお世話になってるんですけども、何年前かに日本人の加害の歴史、と言うのを見てその前に武蔵小金井の方ですね。731部隊のがあって戦争について自分が戦後世代、71なんですけど、じかにはわからないんですけど加害の歴史って言うドキュメントを見たときにどきとした。最近12月8日開戦の、ハワイ開戦の日、あの時メディアが全部見だしに出した。8月10日にNHKがPTSD（戦争に）、参加した人の親の世代がPTSDになってその息子たちの話があって。ハートネットTVでね。やはり戦争に着眼するときに、やはりちゃんと知るために講演とか、映画とか見て回っています。で、今回ウクライナ戦争が始まっているんですね。 ↗

↗ あれ、これ、前、日本が満州に行ったときに近いじゃないかと、近現代をちゃんと勉強したい。自分ではしゃべれない、でもあの時の日本が満州に進出したときの話って言うのも、きちんと学校では学び切れてない。マスコミ、メディアもちゃんとそれを言ってない。どっかの先生とか本とか、あるんだろうけどわかってない。日本の近現代史をもう1回勉強して今回、これを機会に学びなおしたい。頭を整理して今の中高校生に伝わるか、それを考えて参加しています。

●S.A.（男性）立川市から来ました。今、伊藤さんも来られてますが、私も新聞記者の端くれをしております、もう現場の取材からは10年ぐらい離れてるんですけども、一番長くいたのは政治部で10年、その中で一番長く担当したのが憲法改正問題、小泉政権で憲法改正論議が盛り上がった時に担当をやっていました。当時は憲法改正に賛成でしたし、集团的自衛権認めて何が悪いと思ってました。今は180度逆の立場です。あまり大きな会合ですと、自分の考えや意見を言うのに差し障りが出てくるんですけど、限られた人数の会合ですし、政治部にいた人間だからわかる部分もあるかと思えますので、少し偏った部分もあるかと思えますが、読ませていただきたいと思えます。

●M.A.（女性）6月に立川で選挙がありまして、生活者ネットワークと言うところから立候補しました。いま、立川市議会議員にさせていただいております。私ははじめてデモに参加したのが、71年生まれなんですけど、1991年のPKO派遣のときに、地元山口県下関市なんですけど、そこでデモに初めて参加したのが平和に対して考えるきっかけになったんじゃないかと思ってます。ほんとうに戦争体験された方々が今、どんどん亡くなられる中で、あの戦争を知らない若い方々も、しっかり自分の国を守らなきゃって言うその思いもあるんだと思うんですけど、どんどんどんどん戦争ができる国になっていくなあと言うことが、どんどん外から固められていようなそんな危機感を覚えています。しっかり勉強させていただいて自分に何が出来るのかって言うことを考えていけたらと思ってます。

●M.I.（女性）私は今母親で、子どもがあるんですけど、なかなか、世の中が、だんだん戦争が出来るようになっていようなところで、何もそういうことを考えないで生活している子供たちに対して何か出来ることはないかと思って、私の親世代のみが、私の親、81、82位なんですけど、その方々が戦前、戦中の生まれでその方々の思いもあるだろうし、…、もう第三次世界大戦に入っているんじゃないかと思っちゃうくらいな今の状態を何とか出来ないか、この場に來たら、もちょっと身近な問題にならないか、真剣にわかっている方に教えてもらおうと来ています。

●S.N.（女性）2013年から「憲法を考える映画の会」に関わっています。あの時は自民党の改憲草案が出てすごく危機感を持って、その会に参加したんですけど、あれから10年位経って行って、世の中がどんどんどんどんおかしくなって行って、今はもしかしたら戦争に巻き込まれるんじゃないかというところに来て、どうしてこんなことになってしまったのかとほんとうに恐ろしい思いです。私、子どもの時に、周りの大人からさんざん戦争の話聞いて、どうしてそんなことに反対しなかったのかと思っただけなんですけど、いざ自分がそういう立場になってみると、反対するのはなかなか難しいことだなというふうに感じております。やっぱり国家って言うのは国民の集まりではおそろくないんじゃないか、と。国家って言うのは国家の理屈をもってそれで動いてるんじゃないかと思っています。そうすると国家を守るために国民が命を捨てるのはやはりおかしいのではないかと思ってます。いろいろ勉強させていただきたい。

資料④ むのたけじの憲法に対する考えについて、憲法学者はどのように見るか。愛敬浩二さん



↑むのたけじ7回忌（2022年8月21日）パネルディスカッション、右端が愛敬浩二さん

※2022年8月21日、むのたけじさんの7回忌（暦の上では6年目）にあたるこの日、「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ—むのたけじと考える憲法 『私の思い、みんなの思い』を語り合う会」が開かれました。そのパネルディスカッションの発言者の一人、愛敬浩二さんのお話しは、私たちがめざして行こうとしているものに大きな示唆を与えてくれたので転載させていただきます。

むのたけじの憲法に対する考えについて、 憲法学者はどのように見るか。

早稲田大学で憲法を教えている愛敬浩二と申します。私は2020年の3月までは名古屋大学におりまして、運動は基本的に地元でやるという人間ですから、2015年の安保法制違憲闘争の時も国会にはいかず、地元でしておりました。そのために、むのたけじさんのお付き合いはなかったです。ただ、中垣先生に言われると、断らないと言うのが、これまでの行動パターンでしたので、私はこの問題に自信がありませんが、お話しさせていただきます。

先ほど、武野さんのほうから、憲法学者としての憲法についてのお話しをしてほしいと言うことでした。先ほど紹介がありました「希望は絶望のど真ん中に」と言う本を読ませていただきました。憲法学者らしくないことを言わせていただきたい。冒頭のむのたけじさんの発言にもあったのですが、ジャーナリズムの役割は何かということです。

むのさんはジャーナリズムの役割について、過去、現在、未来をつないで、話を伝えることがとても大切だと話しています。ウクライナ戦争を見るにつけ、その役割を果たしているか、一私人としてその想いがあるので、それを話して、その後、憲法についてのむのさんの考えにコメントさせていただきたい。

きのうの朝日新聞（2022年8月20日）に元エジプトの外務次官フセイン・ハリディさんのインタビュー記事が載っていました。ヨーロッパや日本はアメリカと一緒にロシアを批判する側についていますが、アフリカ諸国、その中で大国になるエジプトはロシアを非難する側についていないですね。ハリディさんがこんなことを言っていますね。

この戦争は悲劇で、まったく不要な戦いだ。ただ、私たちは欧米が言うようにウクライナの独立や民主主義を守るための戦いだとは見ていない。2003年のイラク戦争もそうだった。米国が自由や民主主義を掲げて始めた戦争は結局、イラクの破壊だった。私はこのことに賛成する。

同じことが今、ウクライナで繰り返されている。ウクライナを助けると言って武器をどんどん送り込み、国土がどんどん破壊されていく。欧米はウクライナを犠牲にして、ロシアを倒したいのだろう。

私はこのことにも賛成する。

欧米の狙いは、第一にロシアが二度と刃向かわないようにすること。第二は、そのロシアと中国の「同盟」を倒すことだ。戦争は最後には交渉によって終わるが、欧米同盟の誰からも、交渉に向けた声が聞こえてこない。

これもそのとおりだと思う。

この新冷戦の状況の中で、エジプトなど「第三世界」の国々は自らの立ち位置を決めなければならない。それは「非同盟」を宣言することだ。自国の利益を守るため、いかなるコストを払っても、どちら側にもくみしないことだ。

ここで、賛成できなくなるんです。

国連は、それ自体脆弱ですし、常任理事国制度という非常に不公平なシステムがあると思うが、国連憲章には二つの大戦を経て、武力行使禁止原則を一応入れているんです。

自衛権の行使は正当な権利でなく、あくまでも刑法学的に言えば違法性阻却事由として、本来違法なんだけれども、自衛権認定される時は違法性がなくなりますよということです。実際は機能していないし、いろいろ問題点もあるけれど、国連憲章の2条4項で定められた武力行使禁止原則を揺るがしてはいけないと私は思うんです。

ですから、ウクライナがNATOに加盟すると、ロシアに大変な軍事的緊張が増すことはわかります。ですから、私は、戦争開始前まで、ウクライナが加盟することに反対する発言をしていました。だけれども、プーチンが戦争を始めた時点で、ロシアは許されない。ロシアは侵略戦争をやって、国連憲章の武力行使禁止原則を常任理事国であるのに踏み越えた。それは絶対許してはいけないことだと思います。この問題に対しては、私は中立ではないんです。

だからこそ、同時に私たちが思い出さねばならないのは、日本はイラク戦争に加担したということです。そのことが今ジャーナリズムの世界でその意識が全く感じられないということです。インターネットでイラクボディーカウント（IRAQ BODY COUNT）というサイトをご存知でしょうか。これはイラク戦争で直接死んだ人ではありませんが、イラク戦争開始からの市民の死体をずーと数えています。このホームページを見ると、ハリディさんがいのようにイラクを破壊した結果、暴力が蔓延する世界になってしまっています。それで数字が曖昧なところがありますが、現在186千人から200千人くらいは死んだということです。イラクの人口4千万人ですので、日本の人口1億2千万人に換算すると、60万人死んでいるんです。国際法上違法なイラク戦争によって死んでいるわけです。それに対して、日本の自衛隊はアメリカの兵員を運んだりして、加担したんです。そのことを忘れて、ロシア側をひたすら非難するのはあまりにも無責任だと私は思います。

むのさんの言葉に、ジャーナリズムが過去、現在、未来を貫くものであるなら、今思い出すべきことは、私たちはイラク戦争に加担してしまったんだ。イギリスでは国会で検証委員会を開いて、これらの責任を問うたんです。ところが、日本では小泉純一郎さんを問うことをやったんですか。それは非常に大きな問題であると私は思います。

むのさんが戦争は狂いだと言いましたが、ロシアのウクライナに対する侵略戦争で、毎日聞きたくないことを聞かれますよね。ロシア兵がウクライナの一般市民を虐待したとか、強姦したとか。それも戦略としてやっているような報道もあります。

資料④ むのたけじの憲法に対する考えについて、憲法学者はどのように見るか。愛敬浩二さん

この話を聞いていて、日本人であるなら当然思い出さねばならないのは、南京事件であり、従軍慰安婦の問題のほうですよ。

ところが、そういうことを言う評論家はいるかもしれませんが、安倍政権が長く続くことによって、メディアでこういう問題を議論しにくい雰囲気があります。ロシアの兵隊さんがやったことは日本の兵隊さんがやったことと同じだと私は見ていて、戦場であれば当然する行為がなされたとは私は見ているわけです。それならば、日本人として改めて思い出して考えていかなければならないと思います。

むのさんは、「日本の政府と国民は敗戦時にすぐやるべきことがあった。満州事変以来の15年戦争の責任の所在、戦場での犯罪行為の裁き、そして、迷惑をかけた諸国民にわびを自らきちんとやるべきであった。なぜそれができなかったか。まっすぐに歴史に立ち向かう能力を失っていたからだ。」と問題認識を語っていましたが、これはイラク戦争に当てはまると思います。むのさんの話で我々の世代は過ちを犯してしまったと語っていましたが、私たちも、イラク戦争を止められませんでしたし、名古屋で自衛隊派兵差し止め訴訟にかかわり、ある程度理解は得られましたが、派兵を止められませんでした。むのさんのいうことはそれぞれの場所で受け止められることかなと思っています。

最後に、憲法学者として、むのさんの書物を読ませていただいで、私は全く同じ見方をしています。実は憲法学者というより、政治学者の渡辺さんも同じ見方なんですが、憲法9条は敗戦国の武装解除として捉える。昭和天皇と戦って、負けた後に昭和天皇を据えるには非武装化しなければ世界が納得するわけがないということは誰でもわかることです。マッカーサーもそのことをわかっていたことです。アメリカは沖縄さえ自由に使えれば、戦力的には満足なので、日本本土を非武装化することにしたと捉えます。

まとめると、憲法9条はまず沖縄に米軍基地を集中させる。私もむのさんが思っているような屈辱的であることと思っています。ただ非常に素晴らしいと思うのは、すぐそばで朝鮮戦争などが起きたんですね。市民の方々が憲法9条の価値を見つけたのです。非武装で行こう。中立で行こう。戦争に関わるのをやめよう。これはすごい決断です。米軍が駐留していて、出動するかもしれないところにいて、中立を選びました。その結果、日本人は戦争で殺してもいないし、殺されておきません。自衛隊は稀な存在だったのです。それが今、ご存知のように安保関連法のもとで、海外派兵ができるようになり、またこの度は集団的自衛権容認により、「台湾有事」になれば、コミットメントできるようになりました。自衛隊は殺すもしない、殺されもしないという独特の軍事組織としてやってきたわけです。それが変わる可能性があります。

これだけぜひ最後に申し上げておきたいのですが、アジアの軍隊で自国民に銃を向けたことのない軍事組織がどれだけあるかぜひ調べてみていただきたいと思っています。

中国は天安門事件、韓国は光州事件、ミャンマーもあります。自衛隊は自国民と向き合っていないですよ。岸首相は安保反対闘争の時に自衛隊を出動させようとしたんですが、当時の赤城宗徳防衛庁長官が「自衛隊が国民の敵になりかねない」と反対した。

そのように言わせたのは、当時の市民の力です。むのさんがいうように、憲法9条そのものが素晴らしいのではなくて、国民が守ってきたことが素晴らしいのです。今は、アメリカは憲法9条を変えたいんですね。それを守ってきた、皆さんおような市民がおり、それを支持する政党がいることで、今憲法9条が大切だということのように私は思います。

戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ —むのたけじと考える憲法—

「私の思い、みんなの思い」を語り合う会
～亡くなってから6年目にあたって～



「私の思い、みんなの思い」を語り合う会
～亡くなってから6年目にあたって～

日時：2022年8月21日（日）

13:30～16:30

会場：文京区民センター3A会議室

（地下鉄春日2分・後楽園駅5分）

プログラム：

- ① むのたけじは語る（その番組・映像から）
● テレビドキュメンタリー番組上映
『家だ11歳むのたけじ—戦争を解す日まで』（25分）
● 映像上映「2016年憲法有明集会での、むのたけじさん反戦の訴え」（10分）
● 報告「むのたけじさんの著作、映像、インタビューから「今に生きる反戦の風潮と行動」を学ぶ「むのたけじ平和塾」の呼びかけ（10分）
● 「むのたけじ平和塾」のよびかけ（10分）
- ② 「私の思い、みんなの思い」【あきらめることをあきらめて】それぞれの考えを出し合う（90分）
「いま戦争と改憲の危機に、私達は何をどうしようやって、闘うか」むのたけじと懇話していただいたみなさんに、むのたけじの反戦の思想について話していただきます。

参加費：1000円 学生・若者：500円

↓愛敬さんのコメントの中にあるフセイン・ハリディさんのインタビュー記事（朝日新聞（2022年8月20日）

どちらにも、くみしない エジプト元外務次官、フセイン・ハリディ氏 ウクライナ危機

ロシアのウクライナ侵攻に対して、国際社会が一致した「ノー」を突きつけることは戦争を終わらせる早道に見える。しかし、実際はロシアを批判せず、中立を保とうとする国が目立つ。エジプトの元外務次官フセイン・ハリディ氏は「多くの国が、この戦争を欧米とは違う目で見ているからだ」と指摘する。この戦争は悲劇で、まったく不要な戦いだ。ただ、私たちは欧米が言うようにウクライナの独立や民主主義を守るための戦いとは見ていない。2003年のイラク戦争もそうだった。米国が自由や民主主義を掲げて始めた戦争は結局、イラクの破壊だった。

同じことが今、ウクライナで繰り返されている。ウクライナを助けると言って武器をどんどん送り込み、国土がどんどん破壊されていく。欧米はウクライナを犠牲にして、ロシアを倒したいのだろう。

欧米の狙いは、第一にロシアが二度と刃向かわないようにすること。第二は、そのロシアと中国の「同盟」を倒すことだ。戦争は最後には交渉と合意によって終わるが、欧米同盟の誰からも、交渉に向けた声が聞こえてこない。この新冷戦の状況の中で、エジプトなど「第三世界」の国々は自らの立ち位置を決めなければならない。それは「非同盟」を宣言することだ。自国の利益を守るため、いかなるコストを払っても、どちら側にもくみしないことだ。非同盟主義はインドネシアで1955年に開かれたバンドン会議（第1回アジア・アフリカ会議）で始まった。主導したのはインドのネルー、中国の周恩来、インドネシアのスカルノ、そしてエジプトのナセルといった指導者らだった。

超大国の代理戦争に巻き込まれた結末はベトナムやリビア、シリアをみれば明らかだ。非同盟主義が戦争を止めるというつもりはない。戦争をしているのは超大国。私たちは超大国の競争や紛争に干渉しないし、巻き込まれない。非同盟は自国の独立を守るための盾だ。

インド太平洋に目を向けると、米国の戦略は中国の封じ込めだ。10年先の将来を見通した時、エジプトはどちらかにつくことに利益を見いだせない。どの国にとっても平和で安全なインド太平洋であってほしい。それは、スエズ運河を起点にその地域とつながるエジプトの利益でもある。

（聞き手・武石英史郎）

※以下は、今月号の月刊誌『journalism』のに掲載された記事です。
この記事の中でこの「むのたけじ反戦塾」について書いたので、その部分を紹介させていただきます。

ロシアのウクライナ侵略を目にして

武野大策

父が亡くなる1年くらい前からこんなことを言っていました、

「もし第3次世界大戦が起きるとすれば、アメリカ、中国、ロシアの3カ国のうち2カ国が結びつき、他の1カ国を潰そうとした時だから、注意しなければならない」

2022年2月24日に、ロシアがウクライナを侵略したニュースがあった時、この言葉を思い出しました。ウクライナはアメリカとNATO加盟のヨーロッパ諸国の武器援助と情報提供を受けて、ロシアと戦っている構図です。もちろん、この戦争はロシア側が先に手を出したのですが、父の視点に重ねてみると、別の景色が見えてきます。構図は少し違うが、やはりロシアを押し込めようとする動きだといえます。

一方、中国に対しては、日本の南西諸島が軍事要塞化され、米軍と自衛隊が「台湾有事」を想定しての日米共同統合演習を行なっていることが気になります。

父は米中露が直接戦いあうことを想定していたが、私には米が近隣国を巻き込んで中露を押し込めようとする、時間をかけた大きな企みの一環であるように見えて仕方がありません。

父は、日本をはじめとして東アジア諸国と欧州各国はこうした動きを牽制することを期待していましたが、米国の思惑に取り込まれ、手先に使われているのではないか。そうすると、戦争の景色は少し変わるが、やはり父が恐れた第3次世界大戦の道を歩んでいて、しかも日本も巻き込まれる道ではないかと恐れを抱きます。

そこで、自分も何か行動しなければならないと思っていた時、憲法を考える映画の会をしている花崎哲さんから、むのたけじの考え方を知りたいと申し入れがありました。そこで、2016年5月3日の憲法記念日に東京臨海広域防災公園で開かれた憲法集会での父の発言録などを渡しました。それらを読んだ花崎さんからこうしたものをみんなで勉強する学習会を作りたくて提案されました。

昨年、3回ほど準備会をして、年末の12月18日第1回目の「むのたけじ反戦塾」を開きました。30人ばかりの人が円形に座って、憲法九条をめぐる話や今の時代状況などについて大いに議論をしました。第2回の反戦塾は3月12日に予定されているが、何らかの提案できるような会にしたいと思っています。

「ジャーナリストがきちんと報じれば」

最後に、活動を続ける上で大事にしている父の言葉を紹介します。

これらは、父が最後に公の場で話した16年の憲法集会での発言で、父が訴えたかったエキスが詰まっていると思います。父は冒頭三つのことを話すと言いましたが、実際は二つしか話していません。そこで、私が前もって聞いていたことなどを参考にして三つ目のことも推察してお伝えします。



一つ目。「戦争とは常識では考えられない狂いで、どの軍隊も敵の国民をできるだけたくさん、早く殺せ。そうすれば勝てるというものです。このような社会正義のないもので、人間の幸福が実現できるわけがない。戦争はなくさねばならない。」これは父の体験でなくとも、今行われているウクライナ戦争を見てもわかります。

二つ目。「ぶざまな戦争をやった残ったのが憲法9条です。憲法9条には別の側面があるが、日本国民は人類に希望をもたらすと受け止めて大事にしてきた。その結果、戦後70年間、自国民の誰も戦死させず、他国民の誰も戦死させないという素晴らしい結果を残した。これが古い世代にできた精一杯のことで大事してほしい」。

そして、三つ目は、「黙祷では誰も気がつかない。声をあげて、口に出して言わないと、誰にも伝わらない。思いは声を出して言おう」ということです。

そうした言葉を、ジャーナリストたちがきっちり受け止めて報じてくれれば、戦争だって止められるのではないのでしょうか。

戦前、報道機関が軍部に圧力をかけられた時に人民のことを思って毅然と対応していれば、太平洋戦争だって止められたかもしれない。父は、そう話していました。「むのたけじ反戦塾」も、このことを踏まえて、いまおきていることをみんなでしっかりぎろんして声を出していきたいと思っています。

(『journalism 3月号
「戦争は止められる」父むのたけじの意志を継いで」より)

なビルディングは、逞しいが威圧しない。素朴だが美しい。五〇世紀を経たのに若々しい。それが島の北端で他の島を見ながら生き続けた人々の心の姿であつたらう。この六本柱を建てるのに、どんな技術とどれだけの労働力を要したか、現代の土建会社の大林組の技術陣が計算した。大人二〇〇〇人は必要だつたらうと計算した。だから生活共同体としての総人数は五〇〇〇人と推測したのです。

ともあれ三内丸山の先祖たちの住んだ跡地に闘争の痕跡は皆無だ。そこに吹く風は、いま渦を巻いて四方に語りかけているのではあるまいか。「現代のエンジニアたちにまともに評価されるほどの建物を、五〇〇〇年も前の人たちが建てた。人々が傷ついたり殺し合つたりなんかしないで力を合わせて生きていたからだ。それなのに、後に続いた人たちは戦争を始めて、すでに何千年も続けてきている。なぜですか。もしかしたら地球を壊すかも知れないほどの爆弾を作ったのは、何のため何故ですか。この問いを人々が自分で自分自身に突きつけて答えたら、後悔をしないで済むではありませんか」。

首の欠けた人骨などもある。戦争が行われていた。推定される時期は今から二三〇〇年前から六〇〇〇年間のことだ。水田耕作の広がった時期です。外国では万里の長城を築いた始皇帝の秦の時代(紀元前二二二年から紀元前二〇六年まで)と重なり、ヨーロッパでは大きな戦争があちこちで続発していた。

では今から五〇〇〇年前、すなわち農耕創始から五〇〇〇年後と重なる時期はどうであつたか。日本の当時の遺跡で有名なものは青森市大字三内字丸山二九三番地だ。クリとクルミを栽培してその実を主食として、ほかにマメ、ゴボウ、エゴマなども栽培していた。戦争にじかにつながる遺物はない。長い期間にわたって人々が和やかに住みついて、人数の最も多いときには五〇〇〇人ほどであつたらうと推測される。

その根拠は後で言うとして、三内丸山で最も注目されるものは直径一メートル、高さ一六メートルの粟の柱が六本、四メートル間隔で二列に、深さ二メートルで立てられている建造物ですな。何であつたらうか。推測は望楼、見張り台、神殿、天文台、南米のトータム・ポール(家族の米歴を示した木彫り)のようなものなど種々様々だ。建てた目的あるいは用途は、現代人の推測とは全く別のものかも知れない。ともあれ、この単純

〈MEMO〉

の群れの襲来や異常天候などの危険にさらされた。それでも農耕の開始をどこまでも求めて成功させたのは、安らかな定住の暮らしを望み続けた人たちが、子供を産んで育てる人たちであったに違いない。その人たちの努力が主軸となって人間生活の全体が固められた。努力をすれば、衣食住にあまり苦労しないで済むようになった。それから一万年、農耕の営みが人間生活にもたらした一切が皆の眼前にある。その内容を確かめるのがこれからのテーマだ。その作業の終わったとき、私たちは世の女性たちに何を言えるか。言うことのできる何かが私たちにあるか。

人間の世は当初からずっと母系社会と形容されてきた。それが最近の一万年間は男の天下となった。農耕の仕事、産物の運搬や貯蔵、更に政治や経済の仕事に競争をやるにも男のエネルギと氣質が適したのか、男どもの専横がはびこった。この事実からして、私たちは二つの問いを聞くに違いない。それに対して、あなたと私はどう答えるか。

「このまま男の天下を続けさせるか。それとも女性が主軸の世に戻して、しかもこれまでは見られなかった男女の結束を実現して世の姿を作り替えていくか。」「人間を年齢別に見ると老・壮・青・少・幼となり、それがどう結びつけられるかで世の活力が違ってくる。今それを二つのグループに分けると、この一万年間は権力や財力を握った年輩者が何ごとにも主導権と命令権を握って、若年層はその下に置かれてきた。今後そのままでもいいか、それとも状態を一変させて清潔で新進のエネルギを世のすみずみまで行き渡らせるか？」

【国際】なんてトンテリア(愚かなこと)

農耕という労働スタイルの誕生は、人間生活に何をもたらしたか。無かったものを土から産む喜びだったろう。農という漢字は、サンズイを付けると濃くなり、ニクツキを付けるとウミ(濃)となってネバネバする。そして農という字は、土を細かく砕いてネバネバするまでこねるといふ動詞だ。そんな状態の土に種子を入れ、あるいは苗を挿して手入れをすると、すてきな命の糧がたくさん実るのだ。それまで素材で粗末な暮らしを強いられてきた人たちは、まさに欣喜雀躍したに違いない。その喜びを噛みしめながら、その人たちの農への取り組みは、いつも熱心で、真面目で、そして絶えず改良を心掛けたであろう。その姿は、今もどこでも農民氣質となっておりすな。

改良を求めてやまないのは農を営む人たちに共通する執念でしょう。か、穀物や野菜、樹木や果物などいずれも品種が多い。例えば樅ですが、わが家にあるのは花の白いのと赤いのと二本きりですが、全世界では八〇〇種類だそうですね。稲も原産地の中国・雲南省を訪ねた人の話ですと、地上のあらゆる土質と気候に合う品種が育てられていて、品種の数は千単位になるそうですな。

このように振り返ると、農業を始めたことは、人類にとって朝の光のような福音だったな。けれど、それは現実の半分でした。もう一つ闇を背負った半分がある。それが何であるかは、特別の知識や研究に頼らなくてもわかるな。

農耕が進むにつれて、人々の間に満腹の喜び、安住の笑いが広まった。そして生産物が余るようになった。余り物は蓄えられて富になる。富は増大だけを欲して減少を嫌う富を背負って富を増やそうとする者たちは、対立し競争する。そして守るにも攻めるにも足場となる陣地を作ろうと四方に境界を刻んでクニ(国家)を作った。

国家とは何だ。人類史の第一ページで神様からもらった有難い組織だ、と描いたロマンがあるけれどホントかしら。地球を見ろよ。地球は四六億歳だというのが、自分の皮膚

に線深く刻み込んだことは一度もない。地球に住む動物は数え方によって二〇〇万種類とも四〇〇万種類ともなるそうだが、それだけの種類の一匹だつて自分の牙か爪で地表に区切りを刻み込んだ事実はない。地表に住むものは動物であれ植物であれ他の生命体であれ、望むところに住んで好きなように往来しなさいと地球は全身を優しく広げているのに、なぜ人類はそれに弓を引くのか。

ここで自己反省の一つを打ちあける。私は東北の農村地帯に生まれた。何百年このかた農をやつてきた百姓たちの子孫だ。だから「農」にも「村」にも誇りを持ってきた。三五歳ごろでしたが、東京・銀座四丁目の角に立って「おお、ムラまつりとそっくりの眺めだな。あたりまえだ。おれはムラの子だ。都会さんよ、覚えていてくれ、ムラをばかにして、いじめて衰えさせたら、あなた方も一掃だよ」と叫んだことがあった。

ちようどそのころ北九州の炭鉱地帯から送られて来た一編のレポートを読んで、ショックを覚えた。石炭掘りの仕事がつら過ぎた人たちが逃げた漁村に行けば、その人たちに助けてもらえた。けれど農村に行けば、大抵の場合その人たちは逃げて来た人たちを追っ手に渡した。と種々の事実を綴っていた。農耕者(農民)の人情に二つの面が

改良を求めてやまないのは農を営む人たちに共通する執念でしょう。か、穀物や野菜、樹木や果物などいずれも品種が多い。例えば樅ですが、わが家にあるのは花の白いのと赤いのと二本きりですが、全世界では八〇〇種類だそうですね。稲も原産地の中国・雲南省を訪ねた人の話ですと、地上のあらゆる土質と気候に合う品種が育てられていて、品種の数は千単位になるそうですな。

このように振り返ると、農業を始めたことは、人類にとって朝の光のような福音だったな。けれど、それは現実の半分でした。もう一つ闇を背負った半分がある。それが何であるかは、特別の知識や研究に頼らなくてもわかるな。

農耕が進むにつれて、人々の間に満腹の喜び、安住の笑いが広まった。そして生産物が余るようになった。余り物は蓄えられて富になる。富は増大だけを欲して減少を嫌う富を背負って富を増やそうとする者たちは、対立し競争する。そして守るにも攻めるにも足場となる陣地を作ろうと四方に境界を刻んでクニ(国家)を作った。

国家とは何だ。人類史の第一ページで神様からもらった有難い組織だ、と描いたロマンがあるけれどホントかしら。地球を見ろよ。地球は四六億歳だというのが、自分の皮膚

てきた。そういうことは、他人に披露するものではない。一つだけ言えば、考古学の本や歴史文献を読んで学ぶ喜びは、年を取るにつれて強まりますな。

さて、この本の足取りは一歩ごとに強まっていくはずだが、過去を見つめ直して過去に学ぶことの大切さを何度も念を押したのはなぜか。その努力は、人類が現在の唯今の課題と取り組むのにぜひ必要であり、あす以後の課題と取り組むのもっと必要だと私は考えるからだ。

女性主導の世へ、若者中心の世へ

いよいよ「農耕創始」との対面です。いいえ、私の思いでは対面ではなく対決だ。土を耕す事始めは、研究者たちの確かめたように約一万年前に現在のイラク国で始まったに違いない。だが、中身は遠方の過去のものではあるまい。農耕のもたらした一切の社会現象が、こんなに唯今すべての人間たちに「人類よ、お前は何をこの先に求め望んで、どんな道をどのように歩み進んでいく所存か」と問うている。この問いに対して道理に叶って答えることが出来なければ、人類はまともに前へ進めないし、進ませてはならぬ

れて、どうするかと考え込んでいた時に職場の先輩の一人に「花鳥風月はニュースではないぞ」と言われた。「花鳥風月はトビックスだ。だから、サクラが咲いたとか、ツルが卵を産んだといった原稿は没にならないで紙面に掲載されるけれど、話題の提供にすぎない。そんなことで満足していたら、いつまでもキシヤにはなれないでトロッコのままでよ」とその先輩は言ったが、では本物のニュースはどのようなものかと言わなかった。無論おれ自身のテーマだ。自分で考えた。

こんな出来事がありました、というだけでは、情報の運び屋にしてもお粗末だ。その出来事は、なぜ何ゆえに発生したか、この原因をしっかりと確かめて、どのようないきさつを経て、どのような結果に至ったか、更にその結果が新しい原因となつてどのような事態になろうとしているか、そこまで見詰めた情報なら、人々の役に立つニュースと言えるだろう、なんてニュースの定義を作ることなんか問題ではない。いつどのような場合にも、底の深い観察力と判断力を働かせ得て一人前のジャーナリストといえるだろうが、その能力をいかにしてわが身につけるか、そこが問われているのだ。もちろん妙策も妙案もあるわけがない。これも、おれ自身のテーマだから、自分で工夫して努力し

のではないか。この問いに対する私の答えを述べる前に、つぶやきを聞いてほしい。農耕をめぐるって思慮していると、考古学＝人類学について私が全く素人のせいでしよう、これまで読んだことも聞いたこともない事柄が、つぶやくように去来する。一人の生活者としての反応です。二つのことを披露する。

(一)二万年前と六九九万年間の関係「農耕創始を語る文章は、どれも時と所と有様をいまカメラで映してきたように語って、今から約一万年前だと念を押す。それに接すると私の関心は、農耕を欠いて先行した時間帯に傾く。最初の祖先たちからして「自分らの食う物は自分らで作れたらなあ。飲みたい水をいつでも安心して飲める場所に住みたいなあ」と願ったに違いない。その願いを容易に実現できなかったのは、人間生活を苦しめる障害や危険があまり多くてひどかったせいだろう。でも先祖・先輩たちは決してあきらめなかった。そして遂に歓喜の変革を六九九万年も掛けて実現させた。

その間に人間としての原質が形成されたことを前のページで四つの側面から確かめた。その原質を本来の鏡として、だれもが自分の状態を映して反省する努力を心掛けるべきでないか。

人類は未開・野蛮から文明・文化へ進んできた。今の人は皆そう思っているようだが、本当は逆方向ではないか。遠い過去の人間たちは外見も持ち物も貧弱だったが、内には気高い誇り、とても温かい心配り、そして絶対にあきらめない決意を持っていたのでないか。だから、あらゆる困難を克服して生命のバトンを今日に至るまで渡してきたのであろう。それなのに一万年前からこちらの人間たちは、思い上がって怠け者になり、粗暴になり、ますます野蛮になってきているのではないか。そうでないと言い切れるか。

(二)「男の天下か母系社会か、年輩者か年少者か」人の世が男だけなら、幾ら多数だつて程なく消える。女たちが居るから栄え続いできた。だから、どこの国作り神話でも、主人公は女の神様・おおかあさんだ。食糧の自給自足にしたつて、万人がそれを望んで誰もが自分なりに工夫したに違いないが、それを成功させた主役は女性たちだったに違いない。どうか。

農耕の手立てを成功させるためには矛盾を食い破らねばならなかった。自然の与える恵みだけに頼って日ごとに居場所を変える生き方を変えねばならなかった。農耕の手立てを仕上げるには、同じ一か所に定住しなければならなかった。だが、定住すれば猛獣

ちは子音しか発音できないと考えられた。生き続けてきた現代人の先輩は子音も母音も発音できると考えられた。チャ、チュ、シヤみたいな声しか出せないのと、アイウエオ・カキクケコ・サシスセソと言える人との差異は一目瞭然ならぬ一耳瞭然です。人と人との情報伝達と相互理解がグループとしての結束力と行動力の差異となり、それが自滅か生存かを分けたのは自然かつ当然の成り行きでしょう。では、その差異は、どこからきたか。研究者の中には食で脳の発達が違ったせいだと指摘する説があるそうだが、私もそれ以外には考えられない。

人類の「農耕創始」は約一万年前です。過去は七〇〇万年の長さであるのに、いのちの糧の自給自足は、わずか一万年前からだ。私たちの先祖・先輩たちにとって、食生活の安定はそれだけ至難だった。大昔の先輩たちは、体格が平均して一四五センチメートルに四五キログラムで、悪天候と戦う技術も、土を耕す道具も知らず、周りの獣たちに食われないために小グループで日ごとに居場所を変えねばならなかった。当然のことに自然に頼って木の実などを食べて生きていくしかなかったろう。大部分の人間の常食は植物オンリーだったろう。

ホモ・サビエンスに至るまで

人類の最初の祖先は、いつ地上に現れたか。これまでは二〇〇万年前とされてきたのが、今は研究が深まって七〇〇万年前までさかのぼった。けれど二が七と変わっても、人類の地球への参入は一番ホヤホヤだ。そういう新参者が、いつの間にか地球の持ち主か王者であるかのように振る舞い続けている。何がそうさせたか、それが人間の特権かこのことについて念を押ししたい。人間の原質について、私は生活者としての観察を四つの側面から述べたが、それをぎゅっと煮詰めればどうなるか。一つの研究報告を紹介する。

同じ一つの先祖から出た人類が、時のたつにつれて数系統に分かれた。数万年前の人たちに対して、その発見された場所からして北京原人あるいはネアンデルタール人といった名称が与えられたが、約二万五〇〇〇年前にたつた一系統だけが生き残って、他の系統はみな消えた。消されたのでなく、いつの間にか自分で消えていった。なぜだ？ 消滅か生存かを分けたカギは、ノドチンコ（口蓋垂）の位置の違いでした。消えた人た

アメリカ大陸の北端に到達した人間集団がいた。彼らは陸地のある限り歩み進んで、果てを確かめると決意した。そして、歩いて住んで、また進んで、およそ二〇〇〇年後に大陸の南端に到達したと推測して、その行程を吟味した研究報告がある。

人間の原質について、私の判断をここで改めてギュッと煮詰めて言おう。「ものごとを実に注意深く吟味し、それに学んで、やると決めたら、とことんまでやり抜く」。これこそ自分の二本足の直立歩行だまじいではないか。そうであるからこそ、過去の考古学者たちは人類に「ホモ・サビエンス」賢人」という呼び名を与えたのではないか。現在の私たち人間のどこが「賢人」か。

以上、人類の歩みを大昔から辿って、今から一万年前の所に来た。これから先は、どの問題もこんにち唯今に膚接する。胸が躍ります。そこへ進む前に、もう一ぺん過去・現在・今後の関連に念を押ししたい。材料は私ことです。

新聞記者になってしばらくして、自分の頭の状態に自分の首をかきつけた。どうももの考える物さしが短くなって、せかせかする。原因はすぐに思いついた。仕事の対象が時々刻々の出来事で、いつも原稿の締め切り時刻を気にしながら働いているせいだ。そ

ところが、植物を主食としながら肉食を加味した一派がいた。彼らは、肉の味のおいしさだけを知ったのではない。獣たちが食べ残して地中に埋めたものをくすねたり、魚や貝を取って食べたりしているうちに、自分の体調の変化に気付いた。体に元気が出て、呼吸が楽で、物が言いやすくなったと知って、肉や魚を加えた食事を続けようと一族で申し合わせて実行してきたであろう。

先ごろ沖縄の石垣島で新空港予定地を試掘したら、数万年前の多くの人骨が獣たちの多くの髄骨と絡み合っ出てきたそうすね。そう言えば私の子ども当時、何のものかは知らぬけれど、しばしば髄の肉をしゃぶったことを覚えている。同じことを先祖たちは意識して続けたのであろう。そして、自由に母音を発音できるようになった。そして約二万五〇〇〇年前に人類を存亡の二派に分断する岐路で生き通す道へ進むことになった。私は想像するのですが、肉食を心掛けた先祖たちが意識して努力を始めたのは、その何百年や何千年前からはあるまい。何万年いや何十万年前からかも知れないと私は想像する。

余談になるが、生まれたアフリカから出発して、ヨーロッパとシベリアを横切って、

やがて私の読書範囲に考古学・人類学が加わった。人類の歩みの全行程を対象とする学問ですね。それを学んだのは、人間の正体を確かめようとしたからだ。人間という生き物の本質、その特質は何だ。そのことの判断があつてこそ、それを抱り所にして人類史を載げると思った。それならば現在ただ今、私の判断はどうであるかを打ち明けよう。四つの側面を持つ。

(一) 独立独歩、自主自立。二足で直立歩行の姿そのものが心の姿である。他の何百万種類の動物で人間に最も似ているのはチンパンジーだが、直立歩行は数分間しかできない。人間は必要なら一日中だつて歩き続けられる。それどころか、地球に登場してから現在まで、その姿勢を守り貫いてきている。(ことわつておきたい。歩行する姿が人間の特徴と聞けば、足を失った人や歩行困難の人は気になさるかも知れない。けれど本当に問題なのは、心の足の直立歩行です。私のこの文章だつて、本当は、人間の生きていく根性を主眼にしているのです。)

(二) 性格は頑固だが、同時に謙虚で慎重。…地球に登場して間もなくの人類の姿を描いた絵を見たことがある。遠くに猛獣たちの姿が見える。絵の中心では、ものを食べている人たちがいる。猛獣たちが食べ残して地中に埋めた肉を掘り出して食べている。その画面には、あくまで生き抜こうとするふてしさが描かれていた。

人類が地球に出現した時、そこにはライオンや虎や狼などの肉食獣たちがむらがつていた。人間たちは「いかにして食うか」に苦しみながら「いかにしたら食われないか」という恐怖と七〇〇万年近く戦い続けてきた。慎重しく、用心深く、しかもうんとしつつくなく、生きてこられなかった。むろん仲間たちをとても大切に合った。戦争での殺し合いなんて夢にも考えなかった。であらう。やつたら即時に絶滅だ。

(三) 個体の個性への尊重。人間たちは何をすることも、しないにも団体を組んだ。そうしないと、外界からの圧力と恐怖で生きてこれなかった。しかし、団体を構成する個体たちを軽んじたり否定したりはしなかった。そんなことをしたら、団体そのものが崩れると知ったからに違いない。…数万年前の先祖たちは穴での暮らしを長く続けた。入り口に火を燃やすと肉食獣たちの襲来を防げて、天候が穴暮らしに適していたからに違いない。その跡地があちこちに残っている。そこには必ず幾つかの焚き火の跡がある。最も多いのは八個だが、それがそこで暮らした家族の数だ。当時の人の平均寿命は三〇

歳止まりで、女たちは流産しやすく、子供が生まれても無事に育てることは至難だったと推測される。だから一組の男女で家族を作っても、子が一人に親が一人を加えて四人が平均で、だから八家族で三二人ですね。約一万年前に農耕を創始する以前の人類は、たぶん地上のどこでも約三〇人のグループを作って生き暮らしていた。それに現代語を当てはめれば、それが市町村であり、国家でもあったわけですね。

さて私は、穴の中に家族の数だけ焚き火の跡がある事実注目する。三〇人そこそこの生活行為のあらゆる部分を共同化できそうですね。それをしなかった。なぜだろう。一個の家族が一個の火を囲んで一緒に食べて一緒に寝る、だから家族が家族になりえたと知ったからだろう。個体を全体に服従させて粗末にしたら、どちらも駄目になると知ったからでしょうね。

穴の中の全体の光景を想像すれば、どんな思いになるか。一組の男女ごとに一個の火を抱いて生きつつ全員で力を合わせる。両性の営みだつて、好きなときに好きなようにあけつづりに営んだ。見たい大人にも子どもにも好きなように見せた。いや、他人の性行為なんかには、誰も見向きもしなかったかもしれない。あるいは、歌つたり踊つたりして加勢したかも知れない。何がどうあれ、想像される穴の中の光景に、現代に生きる私は青空を見る。「野蠻」や「未開」とは反対のものを感ずる。あなたは何か？

(四) 改良・改善・変革を求め続ける執念。…過去の人たちの作った物は、いま遺物や遺跡などとして私たちの目の前にある。そこに込められているものは、そのまま出来るだけ長く保存させたい欲求、または絶えず改めて進めたい欲求である。どちらを主軸として受けとめるか、人さまざまで、それはそれでよいだろう。私自身は、絶えず改めて変え、高めた欲求が人の心の主軸だつたと受けとめる。そのために絶えずいろいろなことを実行したのであるまいか。

これはアメリカの女性作家の小説の一節ですが、二万年前のこと、人たちの一グループが、他の全く新しいグループに行くわした時には、お互いに娘を一人ずつ出して交換した。近親結婚のマイナスを指摘する現代医学を待たず、人類の遠い先輩たちがその対策を実行していたことは、実際にあったであろう。そういう努力を何万年も何十万年も積み重ねてきたから、だからこそ一万年前に農耕創始という大革命を実行出来たに違いない。

やがて私の読書範囲に考古学・人類学が加わった。人類の歩みの全行程を対象とする学問ですね。それを学んだのは、人間の正体を確かめようとしたからだ。人間という生き物の本質、その特質は何だ。そのことの判断があつてこそ、それを抱り所にして人類史を載げると思った。それならば現在ただ今、私の判断はどうであるかを打ち明けよう。四つの側面を持つ。

(一) 独立独歩、自主自立。二足で直立歩行の姿そのものが心の姿である。他の何百万種類の動物で人間に最も似ているのはチンパンジーだが、直立歩行は数分間しかできない。人間は必要なら一日中だつて歩き続けられる。それどころか、地球に登場してから現在まで、その姿勢を守り貫いてきている。(ことわつておきたい。歩行する姿が人間の特徴と聞けば、足を失った人や歩行困難の人は気になさるかも知れない。けれど本当に問題なのは、心の足の直立歩行です。私のこの文章だつて、本当は、人間の生きていく根性を主眼にしているのです。)

(二) 性格は頑固だが、同時に謙虚で慎重。…地球に登場して間もなくの人類の姿を描いた絵を見たことがある。遠くに猛獣たちの姿が見える。絵の中心では、ものを食べている人たちがいる。猛獣たちが食べ残して地中に埋めた肉を掘り出して食べている。その画面には、あくまで生き抜こうとするふてしさが描かれていた。

人類が地球に出現した時、そこにはライオンや虎や狼などの肉食獣たちがむらがつていた。人間たちは「いかにして食うか」に苦しみながら「いかにしたら食われないか」という恐怖と七〇〇万年近く戦い続けてきた。慎重しく、用心深く、しかもうんとしつつくなく、生きてこられなかった。むろん仲間たちをとても大切に合った。戦争での殺し合いなんて夢にも考えなかった。であらう。やつたら即時に絶滅だ。

(三) 個体の個性への尊重。人間たちは何をすることも、しないにも団体を組んだ。そうしないと、外界からの圧力と恐怖で生きてこれなかった。しかし、団体を構成する個体たちを軽んじたり否定したりはしなかった。そんなことをしたら、団体そのものが崩れると知ったからに違いない。…数万年前の先祖たちは穴での暮らしを長く続けた。入り口に火を燃やすと肉食獣たちの襲来を防げて、天候が穴暮らしに適していたからに違いない。その跡地があちこちに残っている。そこには必ず幾つかの焚き火の跡がある。最も多いのは八個だが、それがそこで暮らした家族の数だ。当時の人の平均寿命は三〇

歳止まりで、女たちは流産しやすく、子供が生まれても無事に育てることは至難だったと推測される。だから一組の男女で家族を作っても、子が一人に親が一人を加えて四人が平均で、だから八家族で三二人ですね。約一万年前に農耕を創始する以前の人類は、たぶん地上のどこでも約三〇人のグループを作って生き暮らしていた。それに現代語を当てはめれば、それが市町村であり、国家でもあったわけですね。

さて私は、穴の中に家族の数だけ焚き火の跡がある事実注目する。三〇人そこそこの生活行為のあらゆる部分を共同化できそうですね。それをしなかった。なぜだろう。一個の家族が一個の火を囲んで一緒に食べて一緒に寝る、だから家族が家族になりえたと知ったからだろう。個体を全体に服従させて粗末にしたら、どちらも駄目になると知ったからでしょうね。

穴の中の全体の光景を想像すれば、どんな思いになるか。一組の男女ごとに一個の火を抱いて生きつつ全員で力を合わせる。両性の営みだつて、好きなときに好きなようにあけつづりに営んだ。見たい大人にも子どもにも好きなように見せた。いや、他人の性行為なんかには、誰も見向きもしなかったかもしれない。あるいは、歌つたり踊つたりして加勢したかも知れない。何がどうあれ、想像される穴の中の光景に、現代に生きる私は青空を見る。「野蠻」や「未開」とは反対のものを感ずる。あなたは何か？

(四) 改良・改善・変革を求め続ける執念。…過去の人たちの作った物は、いま遺物や遺跡などとして私たちの目の前にある。そこに込められているものは、そのまま出来るだけ長く保存させたい欲求、または絶えず改めて進めたい欲求である。どちらを主軸として受けとめるか、人さまざまで、それはそれでよいだろう。私自身は、絶えず改めて変え、高めた欲求が人の心の主軸だつたと受けとめる。そのために絶えずいろいろなことを実行したのであるまいか。

これはアメリカの女性作家の小説の一節ですが、二万年前のこと、人たちの一グループが、他の全く新しいグループに行くわした時には、お互いに娘を一人ずつ出して交換した。近親結婚のマイナスを指摘する現代医学を待たず、人類の遠い先輩たちがその対策を実行していたことは、実際にあったであろう。そういう努力を何万年も何十万年も積み重ねてきたから、だからこそ一万年前に農耕創始という大革命を実行出来たに違いない。

ページを改めて本題へ進もう。現在の人類にとって何が根本の問題であって、今後どうなるか、どうせねばならぬか、それを確かめるには、まず人類の過去を明らかにしないと行かない。そのことで従来の私は余りに学習不足で無知でした。現在の青少年たちはどうか。老婆心ならぬ老翁心(おきなこころ)がうずまきます。

地球の過去に生物の大部分が死滅したと推測される事態が少なくとも三度起こった、と研究者たちは言う。火山の連鎖爆発で地表の熱した時、反対に気象の異変ゆえに地表が凍結した時、そして無数の星が地球に降った時だ。これらは人類の出現以前でしかたから、人間の誰とも無関係だ。けれど同様の事態が四度目に発生したら、全責任が人類にある。ゆえに対策を立てる国際会議があちこちで催されてきたが、責任のなすり付けと責任逃れを繰り返すばかりですね。「チキウウオンタンカ」なんて優しい声を繰り返して、迫りつつある恐怖がピンとこないのではないか。

入する」——幼稚園から大学院まで、あらゆる教育現場が就職予備校化した。

そして現在、ごらんの通り、学校を卒業したけれど就職できない若者たちの青息吐息が深刻な社会問題になっている。経済変動のせいであろうが、それだけではない。教育の本質を曲げて株式会社たちの求めに応じようとした余り、社会の現実の職場で役に立つ能力を青少年から奪ったのではないか。ここに私の確信する判断を刻んでおく——「やると決めたなら二〇〇〇年続けてやり通すし、やり通せるもの、それこそ、それだけが教育というものの方針である。」

話を元に戻す。記者として働き始めてすぐに自分が実社会について物を知らなすぎると思い知らされた。それを本で補おうとした。従来からの読書好きに拍車を掛けた。少ない月給の半分が本代になった。記者仲間でも、それは珍しくなかった。いまいち出しても頭が下がるが、新聞街の先輩たちは一様に後輩たちに勧めるのでした。——「一方のポケットに原稿用紙、片方のポケットには文庫本、ヒマがあったら本を読め。良く書きたかったら、良く本を読め。読む本を選べ。もし迷ったら、発行されて二〇〇年以上過ぎた本を読め。そんな本はきっと現代人に役立つ」と。

第一章 現在を刺す七〇〇万年の歩み



*16ページから11ページに遡る形で上段右上から左上、下段右下から左下の順で読み進みます。

人間性の本質には四つの側面

他人事ではない。自分自身を振り返れば、私は学校と名のつく物へ一五年も通ったが、人類や地球についての基本の認識や基礎の知識は、どこでも学ばず教わらなかつた。「天皇のため……」「お国のため……」が、いつも青少年にのしかかっていた。現代の学校は、どんな状態か、現在の青少年はどうしているか。とても気になるので、ここで言わせてもらおう。

教育という営みは、教えて育てているなんていう無礼な行為ではない。ラテン語の教育という言葉は「引き出す」エドゥカーレ」という動詞を母としていて、教育行為はまさに引き出す情熱、その努力から始まる。若者たちの内面にあるものを丁寧に引き出して光を当てて、吟味して改めるべきものを改めながら、あらゆる可能性を存分に伸ばして育つようにする、それが教育の本質ですね。その道を戦後の日本教育は歩み始めたけれど、途中で変わった。途中で自分を自分で変えた。一九七〇年代に日本は経済大国に生まれ変わったと自画自賛しながら国家の教育方針を三つのスローガンに変えちゃった。「人的資源を開発する」「愛国心を育てさせる」「教育の世界に資本主義の活動を導